

一冊の本

2024.7.23

私は、読書家ではない。そう言えるほど読んではいない。間違っても、趣味が読書などと言つたりはしない。他の人と比べたことはないが、ほどほどに読んでいるくらいであろう。

自分が本を読み始めた記憶となると、小学生まで遡ることになる。今でもはっきりと覚えている一冊の本がある。アレクサンドル・デュマ・ペールの小説『モンテ・クリスト伯』の日本版である。確か児童書のコーナーにあったその本は、『巖窟王』という名前だった。

それまでも、本は読んでいた。それなりにおもしろかったし、ためにもなった。たぶん、そうだったと思う。残念ながら記憶には残っていない。ところが、『巖窟王』は、はっきりと覚えている。本屋さんに行き、母親に買ってもらった本だった。家に帰り、自分の部屋で読み始めた。わずか数時間で一気に読んでしまった。読み終えたときには、部屋は暗くなっていた。明かりもつけずに夢中になって読み耽った。このとき、初めて本がおもしろいと感じた。いわば、私の読書人生の始まりだった。

『巖窟王』と出合って以来、ますます本というものに興味をもつようになった。中学生になると、兄は東京の大学に行ってしまった。主がいなくなった兄の部屋は寂しげだった。ふと兄の部屋に入つてみた。本棚には、何冊もの本が並んでいた。『国盗り物語』という分厚い本に目がいった。歴史好きの私には、魅力的なタイトルだった。あまりにも厚みがあるため、読めるのかどうかわからなかつた。とりあえず読み始めてみた。すると、やめられなくなり、一気に読んでしまつた。作品にのめり込む自分がいた。自分がそうなることに、自分でも驚かされた。作者は、司馬遼太郎という方だった。この方が、あまりにも有名な作家であることは後で知つた。自分の歴史好きに、さらに拍車がかかつた。

中学生になると、読書生活も軌道に乗ってきた。それは、星新一のショートショートの文庫本のおかげである。星新一の本は、すべて読んだ。本棚には、星新一がズラッと並んだ。お金がない中学生でも、文庫本ならば何とかなつた。ショートショートは話が短い。なおかつ、意外な展開と結末が待ち受けている。一冊に、いくつかの話が収録されている。したがつて、短い時間で一つの話を読み終えることができた。

勉強の合間に、一つの話を読む。それで休憩は終わるはずだった。ところが、休憩は延々と続くことになる。次から次へと読み進めてしまう。勉強時間よりも読書時間の方が上回るのが常だった。一冊の本との出会いが、人生を豊かにすることがある。長く生きていると、忘れられない一冊の本との出会いがある。それは、これからでも起こり得ることだと思っている。